
海賊戦隊ゴーカイジャー ～伝説を継ぐ者達～

ユートピア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海賊戦隊ゴーカイジャー ～伝説を継ぐ者達～

【Nコード】

N0676Z

【作者名】

ユートピア

【あらすじ】

世界を守った34のスーパー戦隊の受け継ぐ35のスーパー戦隊、海賊戦隊ゴーカイジャーの力を得た少年は何を求める！！

『派手に行くぜ！！』

なお原作が跡形もなく崩壊している作品があるのでご了承下さい。

第0話 プロローグ(前書き)

新しく始めちゃった……

読んでくれたら嬉しいです。

第0話 プロローグ

真っ白な空間に一人の少年が居た。

「……………どこだ、ここ？」

漸く絞り出した言葉がそれだった。

「よし、まずはこれまでの事を思い出すか」

少年は自分の行動を思い出していった。一つう！ 朝起き学校へ行く！

二つう！ 学校が終わりバイトへ行く！

三つう！ バイトから帰る途中信号無視のトラックに跳ね飛ばされ
そんな子供を見つけ助けたが自分が跳ねられた！

「……………って死んだし俺！？」

少年は驚きながら自分の体を見た。

「肉片になつてる筈なのに、ちゃんとある」

「それはここが死後の世界だからだ」

少年は声がした方を見ると一人の男性が立っていた。

「何だ、おめえ？」

少年は警戒しながら男性を見た。突然背後に現れたから警戒するのは当たり前だが、

「まあ、それより頼みがある」

「・・・・・・・・・・・・・・・・頼み？」

少年が聞き返すと男性は頷いた。

「実は君にある世界を救って欲しい」
「……………はっ？」

少年はいきなりスケールのデカさに戸惑った。それもそうだが、いきなり世界を救えと言われたら誰でも戸惑う。

「待てよ、何でいきなりそんな話に何だよ？ それに唯の人に救えるか？ 世界が」
「だから、その力を与えるから救ってくれ」

そう言って男性が取り出したのは携帯のような物と赤い人形だった。

「何だよそれ」
「携帯のは、“モバイルーツ”この人形のような物は“レンジャーキー”だ」
「その前に俺は救うなんて言ってねえ」

少年はそっぽを向くが男性はモバイルーツとレンジャーキーを少年

に差し出した。

「だったら最初に断る筈だ。なのにお前は力がないと言った」

「だから何だ？」

「救う気にいるんじゃないのか？」

「な訳あるか」

少年は頭をかきながら男性の持っているモバイレーツとレンジャーキーを見た。

「それに俺がそれでその世界を征服するって考えないのか？」

少年の問いに男性は口元に笑みを浮かべて、

「ないな」

それを否定した。

「根拠は？」

「子供を助けた。それだけさ」

「たまたまかも知れないぜ？」

「わざわざ自分が死ぬかも知れないのにたまたまで済ませる奴いるか？」

「たまたま目に映ったからな」

男性は笑みを浮かべたまま少年の肩を叩いた。

「そんな、助けようとする気持ちがあるから君に救って欲しい」

少年は男性とモバイルレッツ、レンジャーキーを交互に見ると鼻で笑った。

「良いぜ。やってやるよ」

「そう来なきやな」

少年は男性からモバイルレッツとレンジャーキーを受け取った。

「で、どうやっていくんだ？」
「慌てるな」

男性はどこからともなく宝箱を取り出し中身を見せた。

「これは……」

少年の目に映ったのは数多くのレンジャーキーだった。

「ある世界で地球の平和を守った34の“スーパー戦隊”の力だ」
「スーパー戦隊の、力」
「そうだ。その力と伝説を受け継ぐ35番目のスーパー戦隊、海賊戦隊ゴーカイジャーだ」
「俺が、受け継ぐのか？」

少年は宝箱を見ながら男性に聞いた。

「ああ、君が守る為に必要な力」

「つまり、持ってけってか？」

「ああ、そうだ」

少年は男性から宝箱を受け取り中を見た後宝箱を閉じた。

「さて、次こそ」

「だから慌てるな」

「………まだあんのか？」

男性が手をかざすと赤い光と共に赤い海賊船が出てきた。

「これは………」

「この船はゴーカイガレオン。君の住む場所も兼ねてる」

「住む場所か、確かに必要だな」

少年はゴーカイガレオンを眺めていると中に入っていく。男性もそれに続き中に入っていく。

「へえ、結構綺麗なんだな」

少年は船内を見ながら真ん中にある椅子に座り隣にあるテーブルに宝箱を置いた。

「これ使って守れてって意味か」

「そう言う事になるな」

少年が隣を見ると男性が柱に寄りかかりながら立っていた。

「後は、仲間を自分の手で探せ」

「当たり前だ。与えられても嬉しくない」

少年は男性の方を見た。

「何だ？」

「聞き忘れたけど、あなたの名前は？」

「人は、私の事を神と呼ぶ」

「神か、取り合えずありがとうな」

少年は礼を言い男性は少年に言った。

「前の名前使えないから、新しいの考えてね」
「いきなりだな」

少年は啞然としながら暫く考え込んだ。

「赤旗………赤旗海だ」
「赤旗、海？」

少年はゴーカイガレオンと旗を見た。

「ゴーカイガレオンの赤と、旗。そしてゴーカイジャーの海」

「成る程な。それで」

少年、海は神を見ると手を差し出した。

「ん？ 何だ」

「握手、だ」

神は鼻で笑いながら海と握手をした。

「で……………どう使うんだ？ これ
等」
「……………そこからか」

海はモバイルーツとレンジャーキー、ゴーカイガレオンを見て言う
と神は溜め息を吐いた。

「頭に直接教えるから、後は自分のやりたいようにやれ」

「ああ、後頼みは聞いといてやるよ」

神が消えると海はモバイレーツを開きレンジャーキーを人形の形から鍵のような形にした。

「行くぜ……………」

海はモバイレーツとレンジャーキーを構えた。

「豪快チエンジー!!」

海はモバイレーツにレンジャーキーを差し込み回すとモバイレーツの上の部分が剣を合わせたような形になり、そして……………

【ゴーカイジャー!!】

その後、海はモバイレーツを前に出し海の体が段々変わっていき赤

い海賊のようなスーツを纏った。

「ゴークイレッド……！」

海は35番目のスーパー戦隊、海賊戦隊ゴークイジャーのゴークイレッドへ姿を変えた。

「派手に行くぜ……！」

ゴークイレッドはゴークイガレオンに乗り込み舵がある部屋に行く
と舵を握り真ん中部分にゴークイレッドのレンジャーキーを差し込
むとゴークイガレオンが動き出しゴークイガレオンの前に光に向か
うとゴークイガレオンは白い空間から消えた。

第0話 プロローグ（後書き）

これから、応援お願いします。

第1話 海賊降り立つ(前書き)

ユズリハって、変換できないし。

良かったら見て下さい。

第1話 海賊降り立つ

宇宙空間に一つの光が現れるとそこから赤い海賊船、ゴーカイガレオンが出てきた。

「宇宙か、滅多に見れないから良いか」

そのゴーカイガレオンを操縦しているゴーカイレッド、赤旗海はそう言いながら目の前にある青い星、地球へ向かった。

「あれは……」

それを顔が黒い十字の中心にある怪人が見ていた。

「忌まわしい海賊かつ」

黒い十字の怪人、“黒十字王”は憎しみの目でゴーカイガレオンを

見た。黒十字王はある世界でゴークイジャーと34番目のスーパー戦隊、天装戦隊ゴセイジャーと戦いスーパー戦隊の力とスーパー戦隊を信じる人々によって敗れていた。

「今こそ復讐の時！ ハアアアアア……ツ！！」

黒十字王の周りに黒いオーラが発生しそのオーラは一つずつ形を現していく。

ゴークイガレオンは地球に到達すると街へ進んでいた。

「さて、何があるんだろうな」

変身を解いた黒髪に赤いコートを羽織った少年、赤旗海は宝箱を開け中のレンジャーキーを探り一つを手にとった。

「これからが楽しみだ」

その手には初代スーパー戦隊の秘密戦隊ゴレンジャーのアカレンジャーのレンジャーキーが握られていた。

街の住人は突如として現れたゴークイガレオンを見ていた。

「うわぁ、騒ぎになってるし、って当たり前か」

窓から見ていた海は下の人混みを見て啞然としていた。

「どこか人気のない所に行くか・・・」

そのままゴーカイガレオンは人気のない場所まで進んでいった。

「あそこが良いな」

海は橋の先にある廃墟を見つけるとゴーカイガレオンの錨を下ろし海は廃墟の前にゴーカイガレオンから出たロープを伝い降りた。

「じゃ、邪魔するぜ」

海は廃墟に入ると廃墟の中は苔や草が生えていた。

「って、あれは」

海は壁際にあるパソコンと段ボールが置いてあり海はそれに近付くが入り口付近から足音が聞こえ振り返り様銃のような物ゴーカイガンを取り出し向けた。

「うわぁ!?!」

「……………何だ? おめえ」

海の目に飛び込んだのは茶色い髪の少年が尻餅をついている光景だった。

「あつ、いや、その……………」

「だぁー!! うじうじするな! 腹立つな!!」

「ええー!?!」

海は少年に近付くと着ている制服の胸倉を掴み少年はそれに驚いた。

「集、どうしたの？」

ピンク色の髪に白いロボットを抱えて少女が入ってきた。

「いのり!？」

少年、桜満集は少女、ユズリハいのりを見て驚いたが海はいのり、集の順番で見ると胸倉を離し少し離れた。

「と言うより、何でおめえ等はこんな所に？」

「それより、上にある船、君の？」

「そうだが、っておめえ等が何でいるかだよ」

海はゴーカイガンを仕舞い再び集といのりを見た。

「僕等は部活で……………」

「部活？」

「そう、現代映像研究同好会って言う部活で」

海は頷きながら壁際に置いてあるパソコンを見た。

「面白そうだな」

「で、あなたは？」

「人に名前を聞く時は自分からだろ」

いのりが言うと海は笑みを浮かべながら言った。

「僕は桜満集^{おひまじ}、でこっちがユズリハいのり。抱えてるのがふゅーねる」

集が自分といのり、いのりが抱えている白いロボット、ふゅーねるを言うと海は頷いた。

「今度は俺だな。俺は赤旗海^{あかひ}、んでもって……」

海から次の言葉が出なかった。何故なら遠くから爆発音が聞こえたからだ。

「何今の!?!」

「爆発音?」

集が驚きののりが冷静に言うと海は廃墟を出て走り出した。

「ちょっと待って!!」

「集……!!」

集は出た海を追いのりはそんな集を追った。

街では灰色の体のゴーミンと青い体のズゴーミンが人を襲ったりビルを破壊していた。

「『『ゴー!』『『『ズゴー!』『『

先頭をズゴーミン三体、その後ろにはゴーミンが何体も居た。

「撃てえー!!」

その先で警官隊が拳銃をゴーミンやズゴーミンに撃つがズゴーミン達は何事もないように歩いていく。

「何だよコイツ等!?!」

「知らないわよ!?!」

そんな警官隊の中に学制服を着た二人の男女が銃を発砲していた。

「これじゃ切りが無い!!」
「キンジ、後どれ位弾ある!？」
「持つか分からない。アリアは!？」
「こつちも似たようなもん」

拳銃を撃つ少年、遠山キンジと銃を二丁持って撃つ少女、神崎・H・アリアはゴーミンやズゴーミンに撃つが弾は減る一方だがズゴーミン達はそれでも歩いてくる。

「ズゴー!」

ズゴーミンの一体が両腕に付いているクローからレーザーを放ちパトカーに当てるとパトカーは爆発して数人の警官が巻き込まれた。

「「「うわああああああああああああああああ!!!!!!!!!!」
「「「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ズゴーミンの一体が撃つたのをきっかけに更にズゴーミン二体とゴ

ーミンが棒のような武器を構えて先端に付いているのをバズーカのように発射するとパトカーやビルに当たり爆発した。

「アリア、無事か!？」

「平気よ別に」

キンジとアリアは何とか軽傷で済み歩いてくるズゴーミン一体にキンジが銃を撃つとズゴーミンの顔に当たった。

「ズゴ?」

「やべえ……………」

ズゴーミンの一体がキンジに気付いてクローを向けた。

「キンジ!？」

アリアはズゴーミンを撃つがゴーミンが邪魔で当たらず逆にゴーミンから狙われていた。

「おのれよくも」

「喋った」

キンジは別の事に驚くがクローにはエネルギーが溜まり何時でも撃てる状態だった。

「くっ!？」

キンジは目を瞑ったが、

「ズゴー!？」

何かの銃撃音とズゴーミンの悲鳴に似た叫びが聞こえ目を開けるとズゴーミンが腕を押さえていた。

キンジとアリアが海に逃げるように言いそれをビルの影から集といのりが見ていた。

「断る」

「何考えてるの!？」

「無理だ! 逃げる!！」

「気に入らねえ奴はぶっ潰す。それが……………」

海はレンジャーキーとモバイルーツを取り出した。

「海賊だ」

海はモバイルーツとレンジャーキーを構えて叫んだ。

「豪快チエンジ!！」

海はモバイレーツにレンジャーキーを入れた。

【ゴーカイジャー！】

海の姿は赤い海賊のような、ゴーカイレッドになると右手に剣、ゴーカイサーベルを握り左手にゴーカイガンを持った。

「ゴーカイレッド！ 派手に行くぜ！！」

ゴーカイレッドはゴーカイガンを撃ちゴーミン達を倒しながら走り出し向かって来るゴーミン達をゴーカイサーベルで切っていく。

「オラア！！」

ゴーカイレッドはゴーミンに回し蹴りを喰らわせるがゴーミンが一齐にバズーカを撃つがゴーカイレッドはゴーカイサーベルでバズーカの弾を切っていく撃ってきたゴーミン達をゴーカイガンで撃ち近付いてきたゴーミンにゴーカイサーベルを刺すと遠くにいたゴーミン

ンをゴーカイガンで撃つ。

「すげえ………」

「何なの、あいつ」

キンジとアリアはゴーカイレッドの戦いを見て唖然とした。

「あれが、海賊」

「………」

見ていた集といのりも唖然としていたがゴーカイレッドはゴーミンの圧倒的な数に苦戦していた。

「流石に多いな」

ゴーカイレッドは腰に付いているゴーカイバツクルから新たなレンジャーキーを取り出しモバイレーツに入れた。

「豪快チェンジ!!」

【ゴージェイジャー!】

ゴージェイレッドは赤い天使のようなスーツにドラゴンがシンボルのゴージェイレッドになると赤い剣、スカイクソードを取り出した。

「スカイクソード! ハッ!!」

ゴージェイレッドはスカイクソードでゴージェイミンを切るとゴージェイレッドは飛びながらゴージェイミン達をスカイクソードで切っていく。

「次行くぜ!!」

ゴージェイレッドは新たなレンジャーキーを取り出しモバイレーツに入れた。

「豪快チエンジー!」

【ジューウレンジャー!】

ゴセイレッドはティラノサウルスを用いたスーツの恐竜戦隊ジューウレンジャーのティラノレンジャーになると剣、龍撃剣を取り出しゴーミンを切る。

「ズゴー!」

ズゴーミンの一体がティラノレンジャーにレーザーを放つがティラノレンジャーはそれを龍撃剣で弾いた。

「うおおおおおおおおおおおおおおお!.....!!!」
「!」
「ズゴー!」

ズゴーミンも駆け出すとティラノレンジャーはジャンプしズゴーミンもジャンプするが、

「ティラノスラッシュユー!!」

空中で切るティラノスラッシュを受けてズゴーミンは爆発した。

「ズゴー!?!」

ティラノレンジャーは着地すると新たにレンジャーキーを取り出した。

「豪快チェンジ!!」

【オーレンジャー!!】

ティラノレンジャーはゴーグルが星形の赤い戦士、超力戦隊オーレンジャーのオーレッドになるとゴーグルから剣、スターライザーを取り出した。

「ハッ!!」

「『『『ゴー!?!』』』」

スターライザーでゴーミンを切るとスターライザーを左手に持ち右腰のホルスターからキングブラスターを取り出し遠くのゴーミン達を撃ちスターライザーとキングブラスターを入れ替えてゴーミン達が振り下ろした棒をスターライザーで防ぎキングブラスターで撃ち抜いた。

「『『『ゴー!?!』』』」

「ズゴー!!」

オーレッドが見るとズゴーミンの一体が向かってきてクローをスターライザーで止めると向かってくるズゴーミンを銃で撃つキンジとアリアの姿が見え目の前にいるズゴーミンに蹴りを入れた。

「邪魔だ」

「ズゴ！？」

オーレッドはもう一体のズゴーミンの背中をキンググブラスターで撃つと蹴ったズゴーミンが向かってきてクローを振り下ろすがオーレッドは避けてキンググブラスターで何度も撃った。

「ズゴツ！？」

オーレッドはスターライザーを一回時計回りに回した。

「秘剣・超カライザー！！」

「ズゴー！？」

オーレッドがスターライザーでズゴーミンは爆発してオーレッドはゴークイレッドに戻った。

「後一仕事、オラア!!」

ゴーカイレッドは近付いてきたズゴーミンに回し蹴りを決め背後から来たゴーマンをゴーカイサーベルで切り立ち上がったズゴーマンを何度もゴーカイガンで撃った。

「ズゴッ!?!　ズゴッ!?!　ズゴー!?!」

ズゴーマンが倒れるとゴーカイレッドはゴーカイサーベルを肩に乗せた。

「終わりだ」

ゴーカイレッドはゴーカイサーベルにあるスイッチを押しゴーカイシリンダーを出すとレンジャーキーをセットした。

【ファッイナルウエイブ!】

「ハアアアアアアア………」

ゴークイレッドはゴークイサーベルを構えてズゴーマンが立つと振り抜き斬撃を飛ばす、ゴークイストラッシュを放った。

「ズツゴーク!?」

ズゴーマンはそのまま倒れて爆発した。

「一丁上がり」

ゴークイレッドは変身を解いて海の姿に戻った。

海はゴーカイガレオンに向かって歩く。

「ちょっと待ちなさいよ!!」

「あっ?」

海はアリアに呼び止められて立ち止まった。

「さっきのは何よ!? それに海賊って……」

「答える気はねえな……」

「はぁ!? 何よ、教える位良いじゃない!!」

「アリア落ち着け。それと、俺達を助けてくれたのか?」

「あいつ等が気に喰わなかっただけだ」

キンジ達の言葉に海は素っ気なく返すと来た道に戻っていく。

「後お前は堂々としてる」

海が言つとビルの影から集が苦笑いしながら出てきてその後にいのりどふゆーねるも出てきた。

「ふう、たくつ」

海がゴーカイガレオンに戻っていく姿を四人と一体は黙って見ていた。

第1話 海賊降り立つ（後書き）

次回はどうなるやら。

お楽しみに。

第2話 ライダーと海賊（前書き）

ツツガミも変換できないなんて、呪われてるのか？

まあ、良いや。あのロケットライダーも登場。

第2話 ライダーと海賊

「んっ……んっ……んっ……何だここと？」

海は目を開けると白い空間にいて目を擦った。

「あー……眠っ……」

海はそのまま瞼を閉じて眠ろうとする。

「おい、起きろ」
「あっ？」

海は呼ばれる声がして目を開けると神が立っていた。

「用事なら簡潔に済ませ」
「寝ながら聞くな」

神が海の頭を揺ると海は神の顔を見た。

「何だ」

「いや、調子はどうかな」と

「別に、体力や反射神経などが上がった位だ。って、お前か、体力上昇などは」

「まあ、な」

「礼は言っておく」

「ああ、なら頑張れ。それだけだ」

海の目の前が光り出し海は目を瞑った。

「んっ・・・・・・・・夢か・・・・・・・・」

海は起きると伸びをしてコートを羽織り寝室を出た。

海はレンジャーキーが入った宝箱がある部屋に來ると宝箱を開き中を探りレンジャーキーを一つ取り出した。

「さて、散歩するか」

海は手に握ったレンジャーキー、特捜戦隊デカレンジャーのデカマスタアのレンジャーキーを宝箱の中に仕舞った。

海は街に降りると商店街を歩いていた。

「さて、どこに行くか」

海は道を歩いていると歩道橋からお婆さんが袋に入った林檎を落とすのを見えた。

「おっ」

「あっ」

海と同じタイミングで林檎を赤い髪の少女が拾った。

「ほらよ」

「はい、婆ちゃん」

「ありがとうね。二人共。これはお礼だよ」

海と少女はお婆さんから林檎を一つずつ受け取った。

「ありがとうな。婆さん」

「おう。ありがとうな、婆ちゃん」

お婆さんが立ち去ると海は暫く見ていた。

「ふう、林檎か」

「何だ、食わねえのか？」

「いや、食つぜ」

海が林檎をかじると少女も林檎をかじった。

「うめえな」

「そうだよな」

二人して林檎をかじりながら暫く歩いていた。

「それにしてもうめえ」
「そうだよな。にしてもあんた、学校はどうなんだよ」
「そう言うてめえも、どうなんだ」
「生憎、行ってないんでな」
「奇遇だな。俺もだ」

二人は林檎を食べ終わると林檎の芯を近くのゴミ箱に捨てた。

「この街、わかりずれえな」
「ならあたしが案内してやろうか？」
「別にいいんだが」

海はふと足を止めた。

「そう言えば名前聞いてなかったな。俺は赤旗海。てめえは？」
「佐倉杏子だ。婆ちゃんから貰った林檎、美味かったな」
「それかよ。まあ、美味いは美味いが」

海は少女、佐倉杏子と話しているとふとある学校が目に入った。

「何だ？ あそこ」

「ああ、あそこは天ノ川学園高校って言う学校だ」

「へえ」

二人が学園を見ていると学園から悲鳴が聞こえ海はすぐさま向かった。

「ちよっ！？ あんた！！」

海は学園の門に手を付き乗り越えた。

学園では中庭で体にオリオン座のあるオリオンゾディアーツがゆっくり歩いていた。

「あれって、まさか」

「体に星座、ゾディアーツ」

集といのりはオリオンゾディアーツの姿を見て唖然としていた。

「こいつっ…！」

キンジやアリアなどの武偵の生徒達は銃でオリオンゾディアーツを撃っていた。武偵とは武装を許された探偵の事で様々な科があり天ノ川学園高校は武偵の生徒の育成も行っていた。

「くっ………」

全く怯まないオリオンゾディアーツの様子にキンジは苦虫を噛んだような顔をした。

「このー!!」
「待てアリアー!!」

アリアは二丁の銃を仕舞い日本の刀を出しオリオンゾディアーツに切りかかるが全く効かなかった。

「嘘………」

オリオンゾディアーツはアリアの手を掴むと教室に向かって投げるとアリアは窓ガラスを突き破って教室の机にぶつかった。

「アリア!?!」
「キンちゃん前!?!」
「なっ!?! ぐわあ!?!」

キンジはオリオンゾディアーツに殴られ壁にぶつかりキンジに向かって叫んだ少女、星伽白雪が近寄った。

「キンちゃん平気!？」

「ああ、何とか（防弾制服じゃなかったら、折れてた）」

キンジはオリオンゾディアーツの怪力に冷や汗を流しそれを見ていた武偵の生徒達が逃げ出していく。

「キンジ、どうすんのよ」

アリアがキンジ達に近寄ってきたが数力所切り傷があった。

「みんな!！」

「理子!！」

キンジ達に金髪の少女、峰理子が近寄ると手を掴んだ。

「ここは一回逃げよう!！」

「確かにその方が……」

オリオンゾディアーツの力を考えた白雪と理子はそう言うが実はまだ生徒の避難がまだ終わっていない為キンジは引くに引けなかった。

「みんなは避難の誘導を」

「キンジ？」

「俺が囿になる」

アリア達が驚いたのも束の間、キンジは銃を発砲しながらオリオンゾディアーツを引き寄せる。

「こっちだー!!」

だがオリオンゾディアーツはキンジを無視して進もうとした。

「クソッ!」

「うおおおおおおおおおおおおお!」

「おい明久!」

一人の生徒が鉄パイプを持ちオリオンゾディアーツに向かい友達であるう生徒が呼び止めるが少年、吉井明久は鉄パイプでオリオンゾディアーツを殴るが逆に鉄パイプが曲がった。

「えっ？」

明久の思考が一回停止しオリオンゾディアーツが鉄パイプを掴んだ時に気付いたが明久はオリオンゾディアーツに鉄パイプごと投げられた。

「ぐわあ！？」

「『明久^{アキ}(明久君)！？』」

明久に駆け寄る体格の良い生徒、坂本雄二とショートカットの女子、島田美波にピンクの髪の姫路瑞希、女子に見える少年、木下秀吉、もう一人の少年、土屋健太通称ムツリーニが駆け寄った。

「お前バカだろ！！ バカだろ！！」

「バカ言うな！！ 何となく効くと思っ」

「無理じゃ。銃が効かぬ時点で」

「取り合えず逃げないと!!」

「明久君、立てますか？」

「……来る」

オリオンゾディアーツは明久達に近寄りキンジはオリオンゾディアーツの背中を撃つが明久達に向かっていく。

「この!!」

アリア、理子も撃つがオリオンゾディアーツには効き目がなく星座の部分が光り出した。

「不味い!!」

「うおおおおおおおおおおお!!……!!……!!」

集がオリオンゾディアーツの頭を鉄パイプで叩いた。効き目はないが気を引くには十分だった。

「ぐわぁ!?!」

「集!?!」

集はオリオンゾディアーツに殴られ飛ぶといのりが集に駆け寄った。オリオンゾディアーツが周りを見渡しているとオリオンゾディアーツの背中から火花が出た。

「まさか……………」

集が目にしたのはゴーカイガンを撃ちながら歩いてくる海の姿だった。

「あんた!?!」

一度見た事があったキンジヤアリア、いのりは驚き明久達は首を傾げた。

「取り合えず逃げろ」

「あなたは？」

「ただの海賊だ」

海はモバイレーツとレンジャーキーを構えた。

「豪快チェンジー!!」

【ゴーカイジャー!】

海はゴーカイレッドに変わるとゴーカイサーベルとゴーカイガン
を構えた。

「派手に行くぜ!!」

ゴーカイレッドはオリオンゾディアーツをゴーカイサーベルで切り
腹に蹴りを入れた後、ゴーカイガンを撃つがオリオンゾディアーツも
殴りかかってくる。

「あんまり効果ないな。ならこいつか」

ゴーカイレッドはゴーカイバツクルからレンジャーキーを取り出した。

「豪快チェンジー!!」

【ゲーキレンジャー!】

ゴーカイレッドは狼のようなマスクに紫のスーツの獣拳戦隊ゲキレンジャーのゲキヴァイオレットになった。

「紫になった!!」

明久達が驚くがゲキヴァイオレットはムエタイのような構えをする

とまずオリオンゾディアーツの顔面を殴り頭を掴むとそのまままた顔面に膝蹴りを入れた。

「次だ」

ゲキヴァイオレットは新たにレンジャーキーを取り出しオリオンゾディアーツが向かってくると腹に蹴りを入れた。

「邪魔だ。豪快チェンジ!!」

【アーバレンジャー!】

ゲキヴァイオレットは白くトップゲイラーを用いたマスクの爆竜戦隊アバレンジャーのアバレキラーになり羽根ペンのような武器、ウイングペンタクトをブレードモードにしてオリオンゾディアーツに切りかかる。

「ウイングペンタクト!!」

アバレキラーはオリオンゾディアーツを横一閃に切ると下から上へ切りオリオンゾディアーツが上空に上げた。

「ときめくぜ。オラアー!!」

アバレキラーは飛び上がると落ちてくるオリオンゾディアーツを切りオリオンゾディアーツは地面に落ちるとアバレキラーは地面に着地した。

「さて、そろそろ終わりにするか」

アバレキラーはオリオンゾディアーツにウィングペンタクトを向けるがオリオンゾディアーツは体にある星座の部分から光弾を放ちアバレキラーはウィングペンタクトをペンモードにして矢を書き光弾を相殺するがその間にオリオンゾディアーツに逃げられた。

「逃げられたか」

アバレキラーは海に戻ると海は門に向かって歩きだした。

「ちょっと待てよ」

そんな海を雄二が呼び止めた。

「何か用か？」

「さっきのあれは何だ？ それにあの怪物は何だ」

「怪物は知らないが、教える気もない」

「おい！！」

「あつ！！ ちょっとあなたに聞きたい事が………って足早
いし」

海が走り出しアリアが追いかけてよとすると既に海は遠くにいた。

「はあ、どうなんだよ」

キンジは頭を抱えて溜め息を吐いた。

あるビルの一室で金髪の青年が電話で誰かと話していた。そしてテーブルには四つのスイッチがはめられた機械があった。

「ゾディアーツが？ それは本当か、集」

『うん。僕等実際に見たから、そうだと思う』

金髪の青年、ツツガミ涯は四つのスイッチがはめられた機械、フォゼドライバーを手に取った。

「集、今からそっちに行く」

『わかった』

涯は電話が切れたのを確認するとフォーゼドライバーを仕舞い部屋を出た。

「あっ、涯」

「ツグミか」

涯が部屋を出ると頭に猫耳がある少女、ツグミが居た。

「どっか行くの？」

「ああ、後を頼む」

「アイ！」

涯はそのままビルを出た。

「よっ」と

海は門を飛び越えると辺りを見回した後行こうとするが……

「どこ行くんだよ？」

「ん？」

海が見てみると門の所で杏子が寄りかかっていた。

「まだ居たのか」

「待っててやったのにそれはねえだろ」

「わりいな。後は好きにフラフラするから、もう良い」

「ならあたしもフラフラしてるよ」

そのまま海と杏子は別れ暫く杏子が歩いているとガラスを引っ掻く
用な音が杏子の耳に聞こえた。

「ふう、食後の準備運動だな」

杏子は近くにあるガラスを見るとポケットから蝙蝠のマークがある黒い四角い物を取り出すと杏子が見ている鏡に大きな蝙蝠が杏子の隣に写ったが杏子の隣には何も居なかった。

その後天ノ川学園は臨時休校になり生徒達が帰る中集といのりは校門に立っていた。

「集、いのり。来たぞ」

「涯………」

「手短に状況を教える」

待っていた二人の元に涯が来ると集は状況を話し始める。

「僕等が騒ぎを聞いて行ってみたらゾディアーツが居て、暫くして自称海賊の」

「撃退したのはそいつか」

「涯、どうする？」

「集といのりはその海賊を捜せ。ゾディアーツは俺が何とかする」
「わかった！」

集は頷くと走り出しいのりも集を追い涯は一人考えた。

(もつここには居ないかもな、なら街か)

涯もゾディアーツを追って走り出した。

海は街を歩きながらゴーカイレッドのレンジャーキーを青、黄、緑、ピンクの色のレンジャーキーを握っていた。

「さて、後四人。誰にするか」
「四人が何？」
「お前との関係あるのか？」
「それはって……あれ？」

海の両脇に何時の間にかアリアとキンジが居た。

「……まさかな」

海は逃げようとするがアリアとキンジは既に海の両腕を掴んでいた。

「逃げられないぜ」
「と言う訳だから答えなさい」
「ええー」

海は露骨に嫌な顔をした。

「あっ、見つけた!!」

そこへ集といのりも来た。

「マジで面倒だな」

海は大きな溜め息を吐いた。

「で、話す気になったか？」

「あいな」

その次の瞬間、爆発音が鳴り海は隙をついて拘束を振り払い爆発音の方へ向かった。

爆発音が鳴った場所では大量のゴーミンとズゴーミン三体に黒い体に銃を持ったシカバネンが居た。

「黒十字王！ 復活したシカバネンのやり方を特にご覧下さい！」

シカバネンが空を向かって叫ぶとゴーミンはバズーカを撃ち人々は逃げ出す。

「お前等、何人たりとも逃がすな！！」

「ズゴー！！」

「ズゴー！！」

シカバネンが歩こうとすると足下が撃たれシカバネンは歩みを止めた。

「またこのパターンか」

海がゴーカイガンを構えている所が目に入り海はレンジャーキーとモバイレーツを構えた。

「豪快チェンジ!!」

【ゴーカイジャー!】

海はゴーカイレッドになるとゴーカイサーベルとゴーカイガンを構えた。

「ゴーカイレッド! 派手に行くぜ!!」
「ふん、やれ!!」

シカバネンの合図を受けゴーミン達とズゴーミン達は走り出しゴーカイレッドは近付いてくるゴーミンとズゴーミンをゴーカイサーベルで切り撃っていく。

「くっそー!!」

ゴークイレッドはズゴーマインの腹を蹴るとシカバネンに向かって走り出す。

「喰らえー!!」

ゴークイレッドはゴークイガンをシカバネンに向かって撃つがシカバネンは受けるが銃をゴークイレッドに向かって撃った。

「ぐわあ!?!」

ゴークイレッドは転がるとズゴーマインがクローからレーザーをゴークイレッドに向かって撃った。

「ガッ!?!」

立ち上がるゴーカイレッドにゴーミン達が棒で何度も殴り付ける。

「うわぁ!?!」

ゴーカイレッドはゴーミン達のバズーカを受けるて飛び近くにゴーカイサーベルとゴーカイガンを落としゴーカイレッドから海に戻った。

「くそぅ……………」

海は口から血を流していた。

涯は街中でゾディアーツを探していた。

「どこに居るんだ？ ゾディアーツは」

涯がゾディアーツを搜索していると遠くで爆発音があった。

「何の騒ぎだ？ ゾディアーツか？」

涯はゴーカイレッドとシカバネン達の戦闘音をゾディアーツの騒ぎだと思いかおうとした。

「うわあああああああああああああああああ！！」

「きゃあああああああああああああああああ！！」

悲鳴が聞こえ涯が見てみるとオリオンゾディアーツが居た。

「こんな所に居たか」

涯はフォーゼドライバーを腰に付け赤いスイッチを順に下ろしていく。

「何、やってるんだろ？ あの人」

そこに偶然雄二達と避難しようとしていた明久が見ていた。

【3・・・2・・・1】

カウントダウンがなり涯はレバーを掴んだ。

「変身！！」

涯はレバーを押し右手を上へ、左手を左斜め下にすると光の輪が現れ涯を包むとジェット噴射の用に煙が出ると涯は頭がロケットに宇宙飛行士のようなオレンジの複眼の仮面ライダーフォーゼに変身し

た。

「凄い……」

「明久!!」

明久は啞然としていると雄二達も来た。

「何じゃあれは？」

「わかんない」

当然のように雄二達もフォーゼを見て啞然としていた。

「ハッ!!」

フォーゼはオリオンゾディアーツに殴りかかりオリオンゾディアーツは殴り返そうとするがフォーゼは屈むと腹を蹴った。

「早く、逃げる……」
「うう……」

子供は半ベソ状態だったが頷き逃げた。

「くっ!？」

涯はフォーゼドライバーを掴もうとするがその前に明久がフォーゼドライバーを取った。

「お前、何を？」
「……」

明久は無言でフォーゼドライバーを腰に付けた。

「明久、何する気だ？」
「アキ？」

「明久君！」

明久は雄二達を見た後スイッチを入れていく。

「まさか！？ やめろ！ それは俺がやる！！！」
「……………見てるだけはやなんだ」

【3……………】

フォーゼドライバーのカウントダウンが始まった。

「僕にだって、出来る事があるはずだから」

【2……………】

明久はレバーを掴んだ。

「だから僕はやるんだ!!」

【1・・・】

フォーゼドライバーのカウントダウンが終わり涯は明久の目を見ると確かな決意があった。

「変身!!」

明久はレバーを押し右手を上へ、左手を斜め下にやるとフォーゼに変身した。

「宇宙・・・・・・・・キターーーー!!」

フォーゼは屈むと両手を万歳ようにあげた。

集がゴーカイサーベルを握りシカバネンを切りいのりはゴーカイガンをもちシカバネンを撃った。

「お前等、何で」

海は驚いた様子で四人を見た。

「あんたから事情聞いてないからよ」

「それとヤバそうだからな」

「人助け、でしょ」

「こつちも聞きたい事……あるから」

海は立ち上げると笑った。

「お前等、気に入ったぜ」

海は懐から四本のレンジャーキーを取り出し集に青、アリアに黄色、

キンジに緑、いのりにピンクのレンジャーキーを渡した。

「これは？」

「それは海賊戦隊ゴーカイジャーのレンジャーキーだ」

「海賊戦隊……………」

「ゴーカイジャーの……………」

「レンジャーキー……………」

海は四人を見た。

「これからどうするか、お前等が決める」

海は四人にモバイルレッツを渡した。

「やるよ。僕は、そう決めたから」

「うん……………私も」

「やってやるわよ」

「ああ、当たり前だ」

四人はレンジャーキーとモバイレーツを構えた。

「へっ、行くぜ」

海もレンジャーキーとモバイレーツを構えた。

「何なんだお前等!？」

海達はシカバネンの問いには答えなかった。

「「「豪快チエンジ!」「」」

【ゴーカイジャー!】

海達の姿は海はゴーカイレッド、集はゴーカイレッドのスーツを青

くしたゴーカイブルー、アリアはスーツを黄色くしたゴーカイエロー、キンジはスーツを緑にしたゴーカイグリーン、いのりはスーツをピンクにしたゴーカイピンクになった。

「ゴーカイレッド！」

「ゴーカイブルー！」

「ゴーカイエロー！」

「ゴーカイグリーン！」

「ゴーカイピンク！」

「『海賊戦隊ゴーカイジャー！！』」

ゴーカイレッド達はゴーカイサーベルとゴーカイガンを構えた。

「五人揃ったんだ。何時もより派手に行くぜ！！」

ゴーカイレッド達はゴーカイガンでゴーマン達を撃っていく。

「行くぜ！！」

ゴークイレッドはズゴーマンとゴーマン達をゴークイサーベルで切りゴークイガンで撃っていく。

「ハッ!！」

「ズゴーク!?」

ゴークイブルーはすれ違いざまにゴークイサーベルで切りゴーマン達をゴークイガンを撃った。

「風穴開けるわよ!！」

ゴークイイエローはゴークイガンでゴーマンを撃ちゴークイサーベルで近寄ってきたゴーマンを切った。

「...!！」

ゴークイグリーンはゴークイサーベルでズゴーマンを切り近くでゴ

ーカイガンを何度も撃った。

「ふっ……」

ゴーカイピンクはゴーカイサーベルでゴーミンを刺し更にゴーカイガンでゴーミンを撃つ。

「いのり……」

ゴーカイブルーがゴーカイピンクの近くに来ると背中合わせになった。

「行ける!？」

「うん……」

ゴーカイブルーはゴーカイピンクにゴーカイガンを渡しゴーミンに刺さっているゴーカイサーベルを抜いた。

「行こう！」
「わかった」

ゴーカイブルーは二刀流でズゴーマンを切りつけゴーミン達も切りつけていきゴーカイブルーが屈んだ所にゴーカイピンクが二つのゴーカイガン撃った。

「ズゴーマン!?」

ズゴーマンは電気を発しながら爆発した。

「ふっ！ はっ！」

ゴーカイイエローはゴーカイガンでゴーミンを撃っていた。

「アリアー!!」
「キンジー!!」

ゴーカイグリーンはゴーカイイエローの近くに来るとゴーカイグリーンはゴーミンを蹴り飛ばした。

「これ、いるか？」

「あつ、借りる」

ゴーカイグリーンはゴーカイイエローにゴーカイガンを渡しゴーカイイエローはゴーカイグリーンにゴーカイサーベルを渡した。

90

「行くわよ!!」

「わかってる!!」

ゴーカイイエローはズゴーミンをゴーカイガンで何度も撃ちゴーカイイエローは屈みゴーカイグリーンはゴーカイイエローを飛び越えゴーカイサーベルでズゴーミンを何度も切った。

「はっ！ アリア!!」

「オツケーー!!」

ゴーカイグリーンはズゴーマンを蹴り飛ばしゴーカイイエローはゴーカイグリーンの肩を使い上に上がるとゴーカイガンで何度も撃つた。

「ズツ、ズゴーマン!?」

ズゴーマンは電気を発しながら爆発するとゴーミンが向かっていた。

91

「行くぞ」

「ええ」

ゴーカイレッドはゴーカイサーベルでズゴーマンを切りゴーカイガンでズゴーマンを撃っていた。

「オラァー!!」

「ズゴーマン!?」

ゴークイレッドがズゴーマンを蹴り飛ばすと更にゴークイガンで撃ち止めと言わんばかりにゴークイサーベルでズゴーマンを横一閃に切り裂いた。

「ズゴツ！？ ズゴー！！」

ズゴーマンはクローをゴークイレッドに振り下ろそうとするがゴークイレッドはズゴーマンにゴークイガンを撃ちズゴーマンの腹を蹴るとゴークイサーベルでズゴーマンを切った。

「ズゴー！？」

ズゴーマンが爆発するとゴークイブルー、ゴークイイエロー、ゴークイグリーン、ゴークイピンクが来た。

「やるじゃねえか」

「まあね」

「当たり前よ!！」

「まだ居るぞ」

「来る」

シカバネンが五人の前に立った。

「見ていたが、もう飽きた。終わりだ!！」

シカバネンは銃やミサイル、レーザーをゴーカイジャーに向けて撃った。

「「「うわああ!?!」」」

ゴーカイジャーが居た場所は爆炎に包まれた。

「ハア！！」

フォーゼはオリオンゾディアーツを殴るが特にダメージはなく続いてオリオンゾディアーツの胸部を蹴った。

「一番右端のスイッチを押せ！！」

「右端？」

フォーゼは涯に言われ一番右端にある のロケットスイッチを押した。

【ロケットノオン】

フォーゼの右腕にロケットの形のロケットモジュールが現れた。

「凄い……………」

フォーゼは暫くロケットモジュールを見ていたがロケットモジュールが火を噴かすとフォーゼはロケットモジュールに引かれるようにオリオンゾディアーツを殴った。

「うわあああ！？ 止まらないいいいい！！！」

「だったらスイッチ切れ！！！」

フォーゼはロケットスイッチを切るとロケットモジュールがなくなりフォーゼは一息ついた。

「何かないかな？」

フォーゼは次にxのランチャースイッチを入れた。

【ランチャー/オン】

フォーゼの右足にランチャーモジュールが現れて足をあげた。

「何これ？」

フォーゼが足を下ろすとミサイルがオリオンゾディアーツを外れ周りに当たった。

「周りに被害を与えてどうする！？ 左端のレーダーでロックオンしろ！！」

「左端の？」

フォーゼは左端のレーダースイッチを入れた。

【レーダー／オン】

フォーゼの左腕にレーダーモジュールが現れオリオンゾディアーツに向けロックオンした。

「ミサイル発射!!」

ランチャーのミサイルは全てオリオンゾディアーツに当たりフォーゼはランチャースイッチとレーダースイッチを切った。

「よし、止めだ!!」

「待て!!」

フォーゼは涯の制止を聞かずロケットスイッチとのドリルスイッチを入れた。

【ロケットノオン】

【ドリルノオン】

フォーゼにロケットモジュールと左足にドリルモジュールが装備された。

「行くよー!」

フォーゼは上空に上がりレバーを押した。

【ロケットノドリルノリミットブレイク】

ドリルモジュールが回転し向けるとフォーゼはオリオンゾディアーツに向かう。

「ロケットドリルキーンック!」

フォーゼのロケットドリルキックはオリオンゾディアーツを捉えオリオンゾディアーツを貫きオリオンゾディアーツは爆発するとフォーゼのドリルモジュールは地面に刺さり暫く回っていた。

「あわあわあわあわあわ」

回転が止まるとフォーゼはロケットスイッチとドリルスイッチを切った。

「目、目があゝ」

「たく・・・」

喜んでいる雄二達を余所に涯は険しい表情をした。

「終わったか」

シカバネンはその場を去ろうとするがいきなり背中を撃たれた。

「ぐわあ!?!」

シカバネンが振り返る。ゴーカイレッド、ブルー、イエロー、グリーン、ピンクの順番でゴーカイサーベルでシカバネンを切った。

「ガハツ!?!」

シカバネンが転がるとゴーカイレッド達はゴーカイガンを構えた。

「一気に行くぜ!?!」

ゴーカイレッドがゴーカイガンのゴーカイシリンダーを立てるとゴーカイブルー達もゴーカイシリンダーを立てレンジャーキーをセットした。

【ファ〜イナルウエ〜イブ!】

ゴークイブルー達は啞然としていた。

第2話 ライダーと海賊（後書き）

次回 第3話

【宇・宙・激・闘】

お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0676z/>

海賊戦隊ゴーカイジャー ~伝説を継ぐ者達~

2011年12月11日15時56分発行